

青海島自然研究路ガイドマップ



①【船越】

昔、このあたりは海峡になっていて、船が通り抜けていたのでこの名があります。もと青海島は2つの島（青海島、通島）でしたが、風や波のため砂州ができ、今のように陸つづきになったといわれています。（この広い平地は春のハイキング広場に、夏のキャンプ場、海水浴場、そして舟遊び（ボート）など広く利用されています。）

②【暖地性植物の北限地】

このあたりは、対馬暖流が北上してくるため、暖地性植物が多く、この付近を北限地とするものもあります。海辺には、春はハマダイコン、夏はハマヒルガオが咲き乱れ、美しいです。またビワの葉に似たハマビワや、ヒサカキの群生もみられます。

③【長浜群洞】

島のまわりは、波の浸食作用で断崖や洞穴が多く、とくに左側150m先に見える約60個の洞穴は長浜群洞といえます。岩が白く見えるのは「みさご」という鳥のふんです。みさごは崖の上に巣を作り、魚などをとって食べます。（みさごは猛禽類で空中から水面に直下し、両足で魚類の頭をつかみ巣に持ち帰る習性があります。）

④【瀬 叢】

この付近の標高は40mで、眼下に見える岩礁は岩がたくさんあることから瀬叢と呼んでいます。東山魁夷画伯の手になる皇居宮殿の壁画の岩はここをモデルに描かれたものです。（また左手はるかに見える青海島の先端を「竹の子」岩といえます。）

⑤【碧濤台】

ここは、高松宮殿下が命名された展望台です。日本海の荒波が岩に砕け散る眺めは勇壮です。前方に遠くかすんで見えるのが萩市の見島で、ここから約38kmあります。

⑥【和っこの浦】

眼下に見える浜一帯を中の浦といいますが、平成元年度後期NHK連続テレビ小説「和っこの金メダル」の舞台となりロケーションが行われたことを記念し、ヒロインの愛称にちなみ「和っこの浦」と呼んでいます。この付近一帯は日本海特有の北風と渦潮に浸食された、たくさんの岩礁が重なり合っています。

⑦【暖地性植物】

このあたりには、マサキ、ツバキ、トベラなどの群生がみられます。マサキは庭木としてなじみがあり、夏にはうすみどりの小さな花を咲かせます。トベラは常緑のかん木で葉は厚く、夏の初めごろ白い花を咲かせ、よい香りがします。

⑧【ヒトモトススキの群生】

このあたりの断崖にはヒトモトススキが群生しています。秋には小さい穂をつけます。1つの株から多くの葉が出るので1本すすきともいい、またその葉が強く、よく切れるのでシシキリガヤともいいます。高さは2mぐらいいなる逞しい海辺の植物です。（この展望台から目に入る奇岩怪礁の姿を「変装行列」と呼んでいます。自然が造った見事な彫刻美です。ここには一生を青海島の真価の宣伝に努力された故橋本勇一氏の胸像が建立されています。）

⑨【十六羅漢】

沖合に16個の仏像が立っているように見えるところから、このあたりを十六羅漢と呼んでいます。（これは中生代の地層を基盤として、幾度の隆起と沈降をくりかえし、侵食されたもの。）岩についている海藻はカジメ、ホンダワラ、ウミトラノオ、オオバクなどで、魚のかくれ場所にもなっています。右前方に見えるのは萩市の相島と尾島で、ここからそれぞれ約9km、12kmあります。（この付近の標高は約30mで、ここからの眺めは、遊歩道中で最も優れています。）

⑩【静が浦】

このあたりを静が浦といい、夏は海水浴で賑わいます。浜辺にはフジナデシコ、ツツブキ、ツルナ、ハマドウなどが自生します。岩礁にはダルマガク、タイトコマなど珍しい植物もみられます。（特にダルマガクは大陸系植物で地質時代の大陸と日本列島とのつながりを物語る植物として珍重されています。）この地点から右側に進むと出発地点へもどります。

⑪【クロマツ】

岩の斜面の所々にクロマツが生えています。クロマツは海風に強くよく発育し、青海島の景色をひときわ引立てています。日本海のはげしい風のため、曲がりくねった美しい形に育っています。（この辺の地質からも、ざっと1億年間の自然の歴史を想像することができます。）

⑫【外海と内海】

起点から900mきたところで、青海島外海側の景色の最終地点で標高は47mです。ここからは外海と内海の大きなちがいがいきと驚かれたことでしょう。（これは日本海の強い北風を青海島の山々でさえぎっているからです。）

⑬【紫津浦湾の捕鯨】

この波静かな入江は紫津浦湾といえます。むかし捕鯨のさかんな時代にはこの湾に「くじら」を追い込み、生捕りにしていました。通には今でも当時のクジラの墓が残っています。（海岸には野生のダンチク「ヨシタケ」が群生しています。）